

国立国会図書館

「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」データベース

<http://rnavi.ndl.go.jp/score/>

日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会

平成 28 年 3 月改訂

目次

はじめに	1
I 「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」データベース概要	1
1. 収録対象	
2. データベースの構成と記録の原則	
(1) 書誌記述	2
① 共通書誌 I D	
② 記述の情報源	
③ 転記の原則	
④ タイトル	
⑤ タイトル・ヨミ	
⑥ 責任表示	
⑦ 版表示	
⑧ 出版地	
⑨ 出版者	
⑩ 出版年	
⑪ シリーズ	
⑫ 楽譜種別	
⑬ 編成	
⑭ 記譜種別	
⑮ 注記(一般)	
⑯ 内容注記	
(2) 著作典拠	7
① 著作者典拠	
② タイトル典拠	
③ 著作者参照	
④ タイトル参照	
(3) 所蔵館情報	9
① 所蔵館情報の構成	
② 所蔵館一覧	
II 「日本の音楽資料」調査研究について	13
1. 調査研究の目的と背景	
2. これまでの調査と成果	
3. 文化庁委託業務	
4. 「日本の音楽資料」調査委員会の構成	
あとがき	15
主要参考文献	16

はじめに

「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」データベースは、国立国会図書館ならびに全国の図書館等 161 機関が所蔵する 1945（昭和 20）年以前に日本で出版された楽譜の書誌データ 11,410 件（所蔵データ 18,666 件）の楽譜所在目録です。

本データベースは、日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会が文化庁委託業務の一環として、平成 21 年度「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」ならびに平成 23～26 年度「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」により実施した『『日本の音楽資料』のデータベース化のための調査研究』によって得られた成果を、国立国会図書館と文化庁との協定「我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定」（平成 23 年 5 月 18 日締結）に基づき公開するものです。著作権は文化庁に帰属します。なお、データは日本音楽学会平成 27 年度事業の一環として改訂増補され、平成 28 年 2 月より更新版が公開されています（上記数字は更新版による）。

今後のデータの修正に関するご連絡は、国立国会図書館音楽映像資料課 <web-onei@ndl.go.jp> を通じて、メールでお送りください。件名と宛先は以下の通りでお願いいたします。
件名：近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編 宛先：国立国会図書館音楽映像資料課

以下に、本データベースの構成と記録の原則、ならびに調査の概要を記載した。

I 「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」データベースの概要

1. 収録対象

幕末期より 1945 年（昭和 20）までに日本で出版された洋楽系の楽譜。朝鮮、台湾など当時日本統治下にあった地域において日本語で出版された楽譜を含む。文字譜、数字譜等五線譜以外の記譜で記された楽譜を含む。日本音楽については、五線記譜およびそれに準ずるもののみを対象とする。教科書、教則本については、楽曲を主体とした編集物に限った。

上記の時代範囲には含まれないが、近代以前に刊行され現存する唯一の洋楽楽譜である「サカラメント提要」（1605）を参考として含めた。

2. データベースの構成と記録の原則

データベースの構成は下記の通りである。

- (1) 書誌記述
- (2) 著作典拠
- (3) 所蔵館情報

データの単位は書誌単位である。出版物 1 に対し書誌（共通書誌）1 を作成、各書誌は典拠レコードを有する。所蔵館情報（所蔵機関名、請求記号、所蔵資料の特記すべき状態——欠損、破損、合冊製本、閲覧の制限、等）を加えて表示される。

書誌の基礎単位は、単行書単位である。それぞれ版単位で細分される。複数巻によって構成されている出版物は集合単位ではなく巻を単位とする。巻によって異なる書誌的事項を明確に

するためにこの方式を採用した。この方式によって、各機関の所蔵資料もまた明瞭に把握される。私製の合本合冊は上記の書誌単位に分割する。

書誌記述にあたって準拠した目録規則は「NCR1987年版 改訂3版」(以下NCR)である。但し、記号法は原則として採用していない。また、形態に関する事項は除外した。以下に記録の主要原則を記す。

(1) 書誌記述

① 共通書誌 ID

21桁(数字、アルファベット、ハイフン記号)で構成。基本IDは書誌単位。基本ID(5桁)+ハイフン+巻次(3桁)+ハイフン+B(編成、2桁)+ハイフン+E(版次、3桁)+ハイフン+補助記号(数字2桁)

補助記号は、当時の出版物に同じ版のもとで異なる出版日付をもつ資料、あるいは同一版次、同一出版日付にあつて内容の異なる資料などが確認されたため特に加えた。

例) 01000-000-B00-E001-00 基本ID以下細分されない。

例) 01001-003-B00-E001-00 第3巻、初版。

例) 01002-000-B02-E015-00 同じ出版者の刊行物で独唱版と合唱版がある場合の合唱版の第15版。

例) 01003-000-B01-E003-01 同じ版次のもとに複数刊行された楽譜で細分を必要とする場合

② 記述の情報源

書誌記述の情報源は記述すべき書式的事項にとつてもっとも適切な箇所を定める。タイトル、責任表示の記述の情報源は、標題紙、表紙、楽譜見出し(楽譜第1ページ)からもっとも正確かつ詳細な箇所を定める。版表示、出版事項は主として奥付による。他の異なる表示は注記する。

③ 転記の原則

記述は転記を原則とする。漢字の字体は現行の字体とする。但し、人名は例外とし、資料の表示を転記した。

(人名例)

例) 瀧廉太郎(滝廉太郎とはしない)

例) 弘田龍太郎(弘田竜太郎とはしない)

かなづかいは転記する。欧文の大文字、小文字は当該言語の使用法にしたがう。

④ タイトル

タイトル記入の方式はNCR(2.1)による。

本タイトルの上部または前方に記されている事項は、それが本タイトルの一部とみなされるときは、全体を本タイトルとして記録する。本タイトルの一部としてみなされず、別個の書誌的事項として判断されるときは、所定の記録順位にしたがって記録する。(NCR2.1.1.1D)

例) 新編 教育唱歌集 → 新編教育唱歌集

例) 教科適用 幼年唱歌 → 幼年唱歌 教科適用

- 例) 地理教育 鉄道唱歌 → 地理教育鉄道唱歌
例) 学校及家庭用 言文一致 叙事唱歌 → 学校及家庭用言文一致叙事唱歌
例) 独唱 荒城の月 → 荒城の月 独唱

巻次の表記は転記する。

- 例) ピアノ曲集II → ピアノ曲集 II (「ピアノ曲集 2」とはしない)

資料全体に対応する総合タイトルがなく、各著作のタイトルが表示されている場合は、所定の情報源に表示されている順序で列記する。(NCR2.1.1.2D)

⑤ タイトル・ヨミ

タイトルのヨミは分かち書きで記入する。

本タイトル中の数字は基本的にはアラビア数字に置き換える。但し、固有名詞、作品名における数字は読む。

- 例) 唱歌五十曲集 → ショウカ 50キョクシュウ
例) 土俗的三連画 → トゾクテキ サンレンガ
例) 第九聯隊の歌 → ダイク レンタイ ノ ウタ

巻次はアラビア数字で表示する。

部編のヨミは、国立国会図書館方式により、判別を可能とする箇所までを読み、以下は巻次に準じ、アラビア数字で記入する。巻次もしくは巻次に該当する部分が複数にわたる場合は、最初の部分をアラビア数字に置きかえる。

- 例) 新作小学唱歌 尋常一二年程度用 → シンサク ショウガク ショウカ ジンジョウ 1
例) 新作小学唱歌 尋常三四年程度用 → シンサク ショウガク ショウカ ジンジョウ 3

巻次が細分化されている場合は、最終番号を丸括弧でつつむ。

- 例) 最新小学唱歌 尋常一二年用 巻上→サイシン ショウガク ショウカ ジンジョウ 1(1)

(注) タイトルのヨミ、分かち書きについては、国立国会図書館の次の細則を参考にした。

『JAPAN/MARC MARC21 フォーマット』における片仮名読み表記要領

「分かち書き基準 (2008年4月以降)」

⑥ 責任表示 (著者、作曲者、編者、編曲者、作詞者、校訂者等)

資料の表示の通り、記載順序も含めて、転記する。責任表示が複数あり、その役割が同一の場合はコンマ (,) で区切る。役割が異なる場合は、セミコロン (;) で区切る。

- 例) 瀧廉太郎 ; 山田耕作編曲
例) 大和田建樹作歌 ; 奥好義曲
例) ペルゴレージ ; 妹尾幸陽訳 ; 堀内敬三編曲

付録の責任表示は注記に記録する。

- 例) 注記 ハーモニカ編曲: 春柳振作

⑦ 版表示

資料の表示（情報源は多くの場合奥付）にしたがう。版次の数字はアラビア数字を用いる。重版の場合の初版表示は注記する。

例) 再版

例) 修正3版

(注1)大正期までの文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』の版次は洋書様式で表示されており、重版（重刷）にそれぞれの表示はなく、底本とした版が記されているのみである。資料に表示されている版次を転記した上で、出版者、出版年に留意し、書誌IDを作った。

(注2)「版」は出版資料を同定する必須要素である。資料の改訂、増補は版次によって示される。戦後の出版物には版次と刷次（同一版の重刷）が使い分けられていることが多いが、戦前の場合には「刷」の表示は稀であって、ほとんどが奥付に「版」で表示される。ほかの版との差を示す「改訂」「修正」などの語が表示されていなくても、「版」によって内容が大きく異なることがしばしばある。楽譜は、厳密に言えば音符1つの変更であっても「版」の異同とみなされる場合もある。わが国の楽譜の目録規則は欧米の規則をモデルにしており、また主要な関心事が現代の出版資料に向けられていることもあって、音楽図書館の目録担当者も、戦前の、ほかの版との差を示す語をもたない「版次」を今日の「刷次」と同様に理解し、注意を払わないことが多い。本データベースは、当時の出版慣例に鑑み、「版次」に特に留意した。「版」は、初版、再版の関係ばかりでなく、『世界音楽全集』（春秋社）のように、初版（正版）のほかに「学生版」、「標準版」が刊行されている場合がある。刊年、内容に相違があり、正版以外の版表示は奥付に目立たない形で記載されている。こうした場合、複数の版を所蔵している場合には区別のための注意が払われるが、正版以外のいずれか1種を所蔵している場合には異版の存在を意識せずに目録が作られることがある。同定作業は委員会が行なった。

⑧ 出版地

出版地は出版者（社）が所在する市町村名を記録する。NCR (2.4.1.2A) 参照。

⑨ 出版者

出版者名は法人の種別を示す語（株式会社、合資会社等）以外は省略してはならない。

出版者名は、出版の時期、出版物の分野によって、変更される場合がある。資料の表示通りに転記する。

三木佐助、三木楽器店、三木書店、開成館、大阪開成館、東京開成館

共益商社、共益商社書店、共益商社楽器店

十字屋、十字屋音楽部、十字屋楽器部、十字屋楽器店、十字屋書店

セノオ音楽出版社

龍吟社、龍吟社音楽事務所

出版者が複数表示されている場合は、最初の出版者を記録する。但し、東京以外の地域出版物で、東京の出版社と共同で刊行されている場合は、当該地の出版社を記録する。発売者は、発行者が個人および官製刊行物の場合、「発売者」が記載されていれば記録する。記録の方法はNCR (2.4.2.2) による。明治期刊行物における「売捌」はこれに該当しない。

⑩ 出版年

出版年は最新の年を記録する。出版年の記録は資料の表示にしたがう（元号を含む）。

年次はアラビア数字に改める。「元年」は1。

例) 大正1

重版重刷の場合の初版年は注記する。

書誌記述の原則はNCRに準拠しているが、出版年については同目録規則(1.4.3.1)に定める規定を改めた。記録の優先年代を初刷年ではなく、最新の出版年とした。上述「版表示」と連動する。

出版年の記録は奥付の表示に拠る。

(注)書誌記述の出版年は資料表示(和暦を含む)のままとしたが、データベースでは西暦年によって検索可能とした。

⑪ シリーズ

シリーズ番号はアラビア数字で記録する。

例) セノオ楽譜90番

シリーズ名は、一連の出版物の主題、性格を示すものであるが、1945年以前の出版楽譜には、出版者(社)番号(出版者管理番号)と兼ねていた場合がある。したがって、今日的理解からすれば「出版者(社)番号」と判断されるものもここに含める。但し、出版者(社)番号が数字のみの場合は、ここに記録せず、注記の最後に、導入句「出版者番号:」に続けて記録する。

例) 資料上の表示 No. 1328 → 注記 出版者番号: no. 1328

⑫ 楽譜種別

楽譜種別は楽譜の形態を示す重要な項目である。オペラの楽譜がスコアか、ヴォーカルスコアか、あるいは、歌曲作品の楽譜が、旋律だけなのか、伴奏もついているのか、ということは、楽譜がどのような性格を有しているのかを判断する材料となるばかりでなく、利用者にとって必要資料選定のための必須の事項である。日本語表記で記録する。

スコア

スコア, パート譜

ミニチュアスコア (縦20cm以下)

ピアノスコア

コンデンススコア (管弦楽曲や吹奏楽曲のスコアの簡約譜。大譜表もしくは3段乃至4段で記譜。2以上の楽器が同一声部を奏する場合は楽器名が略語で記載されている。)

クローズスコア (多声部が大譜表で記譜されている声楽のスコア。讃美歌集、教科書の合唱曲譜に多い。)

ヴォーカルスコア

旋律譜 (声楽の譜で旋律のみが一段で記譜されている譜)

(注) 独唱曲(ピアノ伴奏/無伴奏)、ピアノ独奏曲、無伴奏器楽曲の場合は記録しない。

⑬ 編成

収録楽曲の編成（演奏手段）またはジャンルを日本語で記録する。

タイトルから判断できる場合は記録しない。

教科書については記録しない。

a) 編成

独唱, ピアノ

独唱, ヴァイオリン(オブリガート), ピアノ

歌, 箏

混声4部, ピアノ、男声3部, ピアノ、女声2部, ピアノ、等

2部合唱, ピアノ（声種の指定がない場合）

伴奏付（旋律に楽器指定のない低音の旋律譜の付いた譜。歌の場合が多い）

ピアノ

オルガン

フルート, ピアノ

楽器指定なし（歌以外の楽曲で楽器指定のないもの。推定しない）

オブリガート楽器付

ハーモニカ

ウクレレ

b) ジャンル

独唱曲（ピアノ伴奏）（注）「歌曲」は用いない。

同声2部合唱曲（無伴奏）

弦楽四重奏曲

管弦楽曲など

⑭ 記譜種別

楽譜の記譜の種別を記録する。

楽譜は時代により、また演奏楽器により、さまざまな譜で記される。ヨーロッパ音楽においても五線譜が一般的になる以前には、ネウマ譜（グレゴリオ聖歌）やリュートのためのタブラチュア譜が用いられていた。19世紀後半、日本における洋楽受容は、五線譜を「世界共通の譜と」して導入することによって開始され、五線譜は「本譜」、五線譜の代わりに音名を数字で記した数字譜を「略譜」と呼称した。西洋音楽の様式が根付いていなかった時期には、五線譜や数字譜のほかにも、音高、音価（音の長さ）を相対的に示す譜なども考案されている。日本音楽のジャンルにあっても洋楽の普及とともに新たに考案された楽譜が生れてくる。記譜法は一方で楽譜の歴史を示すとともに、他方で音楽の普及と展開を如実に示すものである。

記譜種別	
五線譜	日本音楽の場合に特に記録する。 (注)「五線譜」は日本音楽および特に記す必要がある場合以外は記述しない。
文字譜 (ひふみ)	ドレミ音名を当時の日本語の慣用的な数字の読みに置き換え、ヒフミヨ…と記譜した楽譜。
数字譜	アラビア数字を音名・階名に用いた楽譜。
数字譜付	譜面中に五線譜の上下を問わず、数字譜が付記されている場合。
数字譜別掲	五線譜と別掲の数字譜。同一ページ、別ページを問わない。
数字譜併用	曲集の場合。楽曲によって数字譜を用い、五線譜と数字譜が混在している場合。
コードネーム付	ギター、ウクレレの場合のように、五線譜にコードネームが付記されているもの。
トニックソルファ	文字譜の一種。幹音を do (記譜は d)、ray(r)、me(m)、fah(f)、soh(s)、lah(l)、te(t) で表す。英国で考案され、明治 20 年代の唱歌譜に用いられた。
アコーディオン譜	アコーディオン用数字譜。押引譜。アコーディオンの奏法「押」「引」を指示した数字譜。
ハーモニカ譜	ハーモニカ用数字譜。ハーモニカの奏法「吸」「吹」を指示した数字譜。明治期にはハーモニカのホール(穴)に番号をつけ、「吸」「吹」を付記することによって音程を指示したものが多いが、大正中期以降になると、一般の数字譜に「吹」「吸」の指示を記号化したものも現われる。いずれも「ハーモニカ譜」とする。
指孔譜	日本の伝統的木管楽器の奏法譜をフラジヨレットなどに応用。
線間歌詞譜	五線に音符の代わりに歌詞が記入されている楽譜。
リズム譜	歌詞に相対的な音価を加えて記した楽譜。
高低譜	歌詞を音高によって図形的に記した楽譜。
タブラチュア譜	三味線、箏、琵琶。譜に音高、音価のほか、楽器固有の奏法が文字あるいは数字で記されている楽譜。
鼓譜	幕末期の太鼓譜。洋式軍楽隊で用いられた。
ネウマ譜	ヨーロッパの中世に用いられた角型の音符を使用した楽譜。 (注) 1605 (慶長 10) 年刊行の『サカラメント提要』は当然ながらネウマ譜で記譜されているが、昭和期にも聖歌集にこの記譜を用いたものがある。

⑮ 注記(一般)

別タイトル(言語の異なるタイトルを含む)、初版表示、装幀・装画など。

2種以上の注記事項の記録の順位は NCR (2.7.3 および 5.7.3) による。

例) 別タイトル: Japanese rhapsody.

初版表示: 昭和10

ハーモニカ編曲: 春柳振作

竹久夢二装画

(注)「装画」は、楽譜全体の装幀ではなく、表紙絵を担当している場合に用いる。

⑯ 内容注記

3人以下の複数の作曲者による 10 曲以下の曲集については内容を注記した。

例) 内容: 日本よい国 / 今中楓溪作詞 ; 服部良一作曲. 乙女の唄 / 今中楓溪作詞 ; 水谷ひろし作曲

(2) 著作典拠

著作典拠(標目)は、著作者典拠(個人、団体)、タイトル典拠(統一標題)よりなる。資料(楽曲)の同定のために、さまざまに表記されている著作者名、タイトル(楽曲名)の統一形を定める。データベースでは、著作者あるいは著作者(作曲者)+作品名の典拠形が示されている。

典拠データには、(株)トッカータより2011年度、2012年度に提供されたToccatà MARC典拠データToccatà MARC AUTHORITIES (Toccatà MARC/A)に基づき委員会が編集、加工したものと、委員会により新たに作成されたものがある。典拠IDコードはアルファベット1文字+数字8桁によって示されるが、うち、アルファベット「a」はトッカータ社提供に基づく典拠コード、「m」(個人)、「n」(団体)は本委員会作成の典拠コードである。

典拠作成にあたり、国立国会図書館典拠目録およびアメリカ議会図書館典拠目録のほか、各国の国立図書館典拠目録を参照した。

Web NDL Authorities (国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス)

<http://id.ndl.go.jp/auth/ndla>

Library of Congress Authorities

<http://authorities.loc.gov/>

① 著作者典拠

著作者典拠標目は著者、作曲者、編者、編曲者等よりなる。個人、団体を問わない。作詞者、台本作者は標目としない。奥付に著者もしくは編者として記載されている当該出版社編集部は、標題紙、表紙等その他の情報源に表示されていない場合は、標目としない。

外国人名は原綴で示し、日本語による人名表記を加えた。日本語の人名表記は流布しているものうち、もっとも適切なものを選定した。

例) 小山作之助 (←責任表示・本元子)

高階哲夫 (←責任表示・小田進吾)

平井康三郎 (←責任表示・平井保喜)

山本正夫 (←責任表示・堤正夫)

山田耕筰 (←責任表示・山田耕作)

Mozart, Wolfgang Amadeus (←責任表示・ヴォルガング モーツァルト)

Puccini, Giacomo (←責任表示・プッチニ)

群馬県 (←責任表示・群馬県社会教育課)

② タイトル典拠

楽譜の書名(タイトル)が楽曲名である場合は当該楽曲名に統一タイトルを与える。内容注記に記載されている楽曲は必要に応じて統一タイトルを与える。外国楽曲は原題と訳題からなる。訳題は流布している曲名のうちもっとも適切なタイトルを選定した。

例) 資料上のタイトル「秋の月」 → 「四季. 月; 編曲」

(注) 瀧廉太郎「四季」第3曲「月」の合唱曲編曲

例) 資料上のタイトル「夜明け」 → 「黒船」

例) 資料上のタイトル「蝶々夫人の歌」

資料上のタイトル「お蝶夫人の歌」

資料上のタイトル「晴れた日の 歌劇『マダム・バタフライ』より」

→ 「Madama Butterfly. Un bel dì, vedremo」

必要に応じて、唱歌集、曲集などに統一的な書名を定めた。

例) 小学唱歌集 (←タイトル・唱歌集 *文部省音楽取調掛編纂)

(注) 題簽に「小学唱歌集」。「小学唱歌集」が慣用。

③ 著作者参照

著作者典拠に採られなかった別表示を参照形として示した。

④ タイトル参照

タイトル典拠に採られなかったタイトル表記を参照形として示した。

(3) 所蔵館情報

所蔵館および所蔵関係事項について書誌ごとに記した。

① 所蔵館情報の構成

a) 所蔵機関コード

b) 所蔵機関名

各館ウェブサイトへリンク

c) 請求記号

d) 機関別資料 ID (資料 ID が明示されている場合)

e) 資料特記事項

文庫等特別コレクション所属資料／資料の欠損、破損／合冊製本／閲覧の制限、等

② 所蔵機関一覧 (50 音順)

ア

愛知教育大学附属図書館

愛知芸術文化センター愛知県図書館

愛知県立大学長久手キャンパス図書館

青森県立図書館

青山学院資料センター

秋田県立図書館

秋田大学附属図書館

イ

飯田市立図書館

石川県立音楽堂資料室

石川県立図書館

糸魚川歴史民俗資料館

茨城県立図書館

岩手県立図書館

岩手大学図書館

工

愛媛県立図書館
エリザベト音楽大学附属図書館

才

大分県立芸術文化短期大学附属図書館
大分県立先哲史料館
大分県立図書館
大分市歴史資料館
大分大学学術情報拠点図書館
大阪音楽大学音楽博物館
大阪音楽大学附属図書館
大阪教育大学附属図書館
大阪芸術大学図書館
大阪市立図書館
大阪府立中央図書館
大阪府立中之島図書館
大谷大学図書館
岡山県立図書館
沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館
沖縄県立図書館
お茶の水女子大学附属図書館
おぼろ月夜の館斑山文庫

力

香川県立図書館
学習院大学図書館
鹿児島国際大学附属図書館
加須市教育委員会生涯学習課
活水女子大学図書館
神奈川県立図書館
関西学院大学図書館

キ

北原白秋生家・記念館
岐阜県図書館
岐阜大学図書館
九州大学附属図書館
京都教育大学附属図書館
京都市立芸術大学附属図書館

京都府立総合資料館
京都府立図書館
近畿大学中央図書館

ク

国立音楽大学附属図書館
熊本県立図書館
群馬県立図書館

ケ

県立長野図書館

コ

高知県立図書館
高知大学総合情報センター(図書館)中央館
神戸女学院大学図書館
神戸市立図書館
神戸大学附属図書館
国際基督教大学図書館
国際日本文化研究センター図書館
国文学研究資料館
国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館
国立国会図書館
国立国会図書館支部宮内庁図書館／宮内庁書陵部図書課図書館係

カ

埼玉県立図書館
埼玉大学図書館
堺市立図書館
佐賀県立図書館

シ

滋賀県立図書館
滋賀大学附属図書館
四国大学附属図書館
静岡県立中央図書館
島根県立図書館
上越教育大学附属図書館

上智大学キリシタン文庫
白井鐵造記念館
市立室蘭図書館

セ

聖カタリナ大学附属図書館
聖徳大学川並弘昭記念図書館
仙台市図書館

ソ

相愛大学図書館

タ

瀧廉太郎記念館
玉川大学教育博物館
玉川大学図書館

チ

千葉県立中央図書館
中央大学図書館

ツ

筑波大学附属図書館

ト

東海大学付属図書館
東京音楽大学付属図書館
東京学芸大学附属図書館
東京芸術大学音楽研究センター小泉文夫記念
資料室
東京芸術大学附属図書館
東京書籍株式会社附設教科書図書館東書文庫
東京大学教育学部図書室
東京文化会館音楽資料室
同志社女子大学図書・情報センター
同志社大学図書館
桐朋学園大学音楽学部附属図書館
同朋学園大学部附属図書館
東北大学附属図書館
東洋文庫

徳島大学附属図書館
鳥取県立図書館
富山県立図書館
豊橋市図書館
都立多摩図書館

ナ

長崎県立長崎図書館
長崎大学附属図書館
名古屋市図書館
奈良県立図書情報館
鳴門教育大学附属図書館

ニ

新潟県立図書館
新潟大学附属図書館
西宮市立中央図書館
日本近代文学館

ハ

函館市中央図書館
八戸市立図書館

ヒ

兵庫県立図書館
弘前市立図書館
弘前大学附属図書館
広島市立図書館
広島大学図書館

フ

フェリス女学院大学附属図書館山手分室
福岡教育大学附属図書館
福岡県教育センター資料室
福岡県立大学附属図書館
福岡県立図書館
福島県立図書館
福島大学附属図書館
藤井清水資料室

藤沢市文書館

琉球大学附属図書館

ホ

北海道教育大学附属図書館岩見沢館

北海道教育大学附属図書館札幌館

北海道教育大学附属図書館函館館

北海道大学附属図書館

北海道立図書館

ワ

和歌山県立図書館

和歌山大学附属図書館

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

マ

前橋市立図書館

松本市中央図書館

ミ

三重県立図書館

三重大学附属図書館

三島市郷土資料館

三原市立図書館

宮城学院女子大学図書館

宮城県図書館

宮崎大学附属図書館

民音音楽博物館音楽ライブラリー

ム

武蔵野音楽大学図書館

メ

明治学院大学図書館

明治学院大学図書館附属日本近代音楽館

明治大学図書館

ヤ

山形大学小白川図書館

山口県立山口図書館

山口大学図書館

山梨県立図書館

リ

立教大学図書館

立命館大学図書館

II 「日本の音楽資料」調査研究について

1. 調査研究の目的と背景

全国各地に散在する音楽資料は総合的に把握されておらず、一方で、時代の経過とともに、散逸・消失・劣化の危機に瀕していること、さらに日本にある貴重な音楽資料を適切に継承・活用していくことは、歴史的・文化的にもきわめて重要な課題であるとの認識から、これまで日本音楽学会、音楽図書館協議会、国際音楽資料情報協会日本支部の3機関は、さまざまな研究活動を行い、また学会発表や出版物等によって、広く社会に訴えてきた。以下では、代表的な実績についてのみ、報告する。

2. これまでの調査と成果の公表

平成14年7月、音楽図書館協議会(専門・公共図書館部会)は、全国の関係機関が所属する「音楽コレクション」を調査し、「日本の音楽コレクション」を発行し、内外の関係機関ならびに研究者に貴重な情報を提供した。

平成17年、日本音楽学会第56回全国大会において、シンポジウム「日本の音楽資料－収集・整理と研究」を開催し、多岐にわたる日本の音楽資料の収集・整理の現状についての問題を提起した。

平成17、18年度、文化庁はニッセイ基礎研究所に「音楽情報・資料の保存及び活用に関する調査研究」を委託した。同報告書完成直後の平成19年11月には、国際音楽資料情報協会日本支部、日本音楽学会(関東支部)、音楽図書館協議会共催によるシンポジウム「日本の音楽資料・情報を考える」が企画された。上記報告書の検討を行なうとともに、今後、日本の音楽資料・情報の収集ならびに活用に関しては、関係諸機関の連携が必要であることを確認した。

平成19年9月、日本音楽学会は「日本の音楽資料」の収集ならびに活用を検討するワーキンググループを設置した。同年10月の総会において、ワーキンググループは、関連機関との連携協力と学会としての活動ならびに資金面での援助を提言した。

平成20年10月、日本音楽学会は総会において、「日本の音楽資料」を調査するための調査委員会の設立を決定し、音楽図書館協議会ならびに国際音楽資料情報協会日本支部の機関と協力して、「日本の音楽資料」調査委員会を発足させた。

3. 文化庁委託業務

日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会は、平成21年度「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」ならびに平成23～26年度「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」により、「『日本の音楽資料』のデータベース化のための調査研究」を実施した。(別表を参照)

平成21年度の調査では、①日本人作曲家の手稿譜、②1945年以前にわが国で出版された楽譜、③西洋音楽の手稿譜、④1900以前に外国で出版された楽譜を対象に、所蔵館調査を実施した。

選定された475機関を対象として当該資料所蔵の有無、ならびに今後の調査参加の意思について書面による調査を実施、結果160機関からの回答を得、指定フォーマットによる記入

を依頼した。

平成 23～26 年度の調査では、21 年度調査の結果、もっとも緊急を要する課題として「1945 年以前に日本で刊行された楽譜」を設定し、「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究—主に 1945 年以前に我が国で出版された楽譜を対象として—（第 1～4 次）を実施した。その結果、国立国会図書館ならびに全国の図書館等が所蔵する 1945（昭和 20）年以前に日本国内で出版された楽譜の書誌情報約 11,300 件、所蔵情報約 18,300 件、所蔵機関 159 機関のデータベースを構築した。ただし伝統的記譜による日本音楽関連の書誌は含まない。

別表：日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会による文化庁委託業務

年度	委託業務の名称	
平成 21 年度	「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」	「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究
平成 23 年度	文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究	「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究—主に 1945 年以前に我が国で出版された楽譜を対象として—
平成 24 年度	「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」(第 2 次)	
平成 25 年度	「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」(第 3 次)	
平成 26 年度	「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」(第 4 次)	

4. 「日本の音楽資料」調査委員会の構成

* = 委員長

日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会委員		
氏名	選出母体	現職等
久保田 慶一*	日本音楽学会	東京学芸大学教授、国立音楽大学教授
福田 弥		武蔵野音楽大学専任講師
上野 大輔		東海大学非常勤講師
安川 智子		国立音楽大学非常勤講師
長谷川 由美子	音楽図書館協議会	国立音楽大学附属図書館特別資料部司書
寺本 まり子		武蔵野音楽大学教授、音楽学学科長
林 淑姫	国際音楽資料情報協会日本支部	旧日本近代音楽館事務局長・主任司書、明治学院大学客員教授
岸本 宏子		昭和音楽大学教授
専門アドバイザー		
金澤 正剛	国際基督教大学名誉教授、元日本音楽学会会長	
松下 鈞	帝京大学教授	
川野 由貴	国立国会図書館利用者サービス部門音楽映像資料課	
長嶺 悦子	国立国会図書館利用者サービス部門音楽映像資料課	
専門調査員（研究員）・調査員		
上田 泰史、鯨井 正子、久保 絵里麻、栗林 あかね、佐野 隆、篠田 牧子、末永 理恵子、土田 牧子、鳥谷部 輝彦、西阪 多恵子、西田 紘子、日比 美和子、堀 朋平、森本 美恵子		

(注) 肩書は在任中の肩書とする

あ　と　が　き

国立国会図書館「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」データベースとして、日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会が文化庁委託業務として行った足掛け7年に及ぶ調査結果が公開されたことを大変喜ばしく思います。ここに至るまでに、関係諸氏ならびに関係機関の多大なるご協力がありましたことを感謝いたします。ご高覧いただき、ご高評賜りたく存じます。

このたびデータベースとして公開したわけですが、戦前に我が国で出版された楽譜の全貌がまだ明らかにされていない段階で、データベースとしての完成度は未知数であります。このデータベースの公開が契機となって今後の研究が促進されることを願ってやみません。

日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会
委員長 久保田 慶一

主要参考文献

一 書誌の同定、典拠ファイル作成にあたって参照した主な文献およびウェブサイト

Sadie, Stanley, ed. *New Grove dictionary of music and musicians*. London ; Washington, D.C.,
Macmillan : Grove's Dictionaries of Music, 1980.

Ibid. 2nd ed. London, Macmillan : Grove, 2001.

『音楽大事典』平凡社, 1981.10-1983.12

Sadie, Stanley [ほか編] 『ニューグローヴ世界音楽大事典』柴田南雄, 遠山一行総監修,
講談社, 1993.1-1995.4.

日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988.2.

『日本音楽大事典』平野健次, 上参郷祐康, 蒲生郷昭監修, 平凡社, 1989.3.

『雅楽事典』小野亮哉監修, 音楽之友社, 1989.6.

ウォラック, ジョン, ウエスト, ユアン編著 『オックスフォードオペラ大事典』大崎滋生, 西原
稔監訳, 平凡社, 1996.3.

永竹由幸 『オペレッタ名曲百科』音楽之友社, 1999.6.

倉田喜弘, 藤波隆之編 『日本芸能人名事典』三省堂, 1995.7.

鈴木徹造 『出版人物事典 明治～平成物故出版人』出版ニュース社, 1996.10.

『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ, 2004.7.

『昭和前期音楽家総覧—「現代音楽大観」』倉田喜弘監修, 林淑姫編集, ゆまに書房, 2008.4.

『日本の作曲家 近現代音楽人名事典』細川周平, 片山杜秀監修, 日外アソシエーツ, 2008.6.

日本放送協会編 『新・外国楽曲の呼び方』日本放送出版協会, 1962.

井上和男編著 『クラシック音楽作品名辞典』改訂版, 三省堂, 1996.12

東京藝術大学百年史編纂委員会編 『東京藝術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』音楽之友
社, 昭和62[1987].4

国立音楽大学音楽研究所編 『唱歌教材目録(明治編)』国立音楽大学音楽研究所, [1981](音楽
研究所年報第4集)

国立音楽大学音楽研究所編 『唱歌索引 明治編1 曲名・歌詞索引』国立音楽大学音楽研究所,
1985.3(音楽研究所年報第5集別冊)

『明治初期讃美歌』東京, 新教出版社, 1978.12.

手代木俊一, フェリス女学院短期大学音楽科研究図書室編 『日本の教会音楽(讃美歌・聖歌)
関係資料目録』フェリス女学院短期大学, 1989.3.

『明治期讃美歌・聖歌集成』手代木俊一監修, 東京, 大空社, 1996.5-1998.7.

川島二郎 『ネイサン・ブラウンと「志無也久世無志與」』新教出版社, 2008.12.

小長久子編『瀧廉太郎全曲集 作品と解説』音楽之友社, 1969.2.
中山卯郎編著『中山晋平作曲目録・年譜』豆ノ樹社, 昭和 55[1980].2
遠山音楽財団附属図書館編『山田耕筰作品資料目録』遠山音楽財団附属図書館, 1984.11.
日本近代音楽館編『明治の作曲家たち』日本近代音楽館, 2003.10.
信時裕子編「信時潔作品表」, 『生誕 125 年信時潔とその系譜』 pp.36-62, 洋楽文化史研究会「信時潔とその系譜」演奏会実行委員会, 2013.11.

堀内敬三『定本日本の軍歌』実業之日本社, 昭和 44[1969].9
金田一春彦, 安西愛子編『日本の唱歌』講談社, 1977.10-1982.5 (講談社文庫)
金子敦子『大正琴の世界』大正琴協会, 1995.2.
倉田喜弘編『江戸端唄集』岩波書店, 2014.9 (岩波文庫)

『日本名物セノオ楽譜声楽譜目録』セノオ音楽出版社, [1929 頃]
大平直樹 [ほか] 編『竹久夢二「セノオ楽譜」表紙画大全集』竹久みなみ監修, 国書刊行会, 2009.8.

『音楽年鑑 (音楽便覧)』昭和 6 年版 ~ 昭和 17 年版, 敬文館ほか, 昭和 6[1931]- 昭和 17[1942].
[復刻版 『近代日本音楽年鑑』松下鈞監修, 大空社, 1997.1-6.]
『音楽年鑑』昭和 24 年版 ~ 昭和 60 年版, 音楽之友社, 昭和 23[1948]-1985.4.

国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」 <http://kindai.ndl.go.jp/> (2016.6 より国立国会図書館「デジタルコレクション」に統合 <http://dl.ndl.go.jp/>)
国立情報学研究所「CiNii Books」 <http://ci.nii.ac.jp/books/>
IMSLP : International Music Score Library Project. Petrucci music library. <http://www.imslp.org/>
OCLC : Online Computer Library Center. WorldCat. <https://www.worldcat.org/>

平成 27 年 3 月 24 日 発行

平成 28 年 3 月 31 日 改訂版発行

編・発行 日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会

〒 102-0072

東京都千代田区飯田橋 3 丁目 3 番 3 号 生光ビル 303
